笛吹市探訪

シリーズ 第24回

武田氏と笛吹市 ②

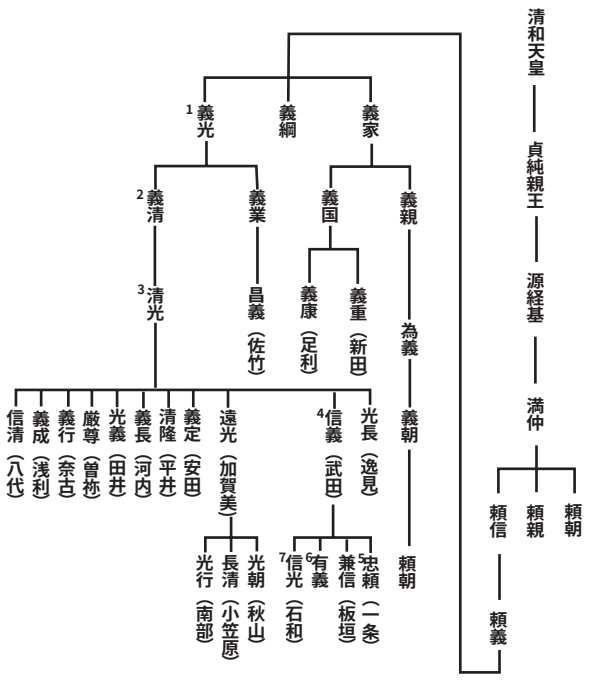
－甲斐源氏武田氏の登場－

平安時代の終わり、西暦1130年頃、常陸国（今の茨城県）を追われた一組の親子が甲斐国にやってきました。甲斐源氏武田氏の祖である源 義光の子義清と孫の清光です。義清親子ははじめ母親の故郷である常陸国那賀郡武田郷（ひたちなか市）で勢力を伸ばそうとしました。同じ常陸の久慈郡佐竹郷（常陸太田市）では義清の兄である義業が勢力を伸ばすのに成功し、中世・戦国時代を通じて常陸国を支配し、江戸時代には秋田の大名となる佐竹氏の基礎を築いていきます。それに対して、義清親子は地元勢力と対立したため朝廷に告発され、甲斐国市河荘（市川三郷町あるいは昭和町）に配流されました。

常陸を追われて甲斐にやってきた義清親子ですが、ここで運命が好転します。清光は八ヶ岳南麓の逸見荘（北杜市）を根拠地として勢力を伸ばし、多くの子供たちを甲斐国内各地に配置しました。かれらは占拠した地名によって氏を称しますが、その中には平井や河内、八代といった笛吹市内の地名も見られます。清光の多くの子のなかで惣領となったのは二男の信義（長男の光長と双子だったとも言われています）。彼の配置されたのが武河荘で、その地名は偶然なのか彼の祖父・父に因縁のある「武田」（韮崎市神山町）。ここから甲斐源氏惣領家が武田氏を称することになります。彼らの生きた時代は源平の争乱期にあたり、その戦いの中で武田氏は力をつけていきます。

平井氏の館があったとされる場所（石和町上平井周辺）

清光の子の中で笛吹市に関係したのは平井清隆、河内義長、八代信清ですが、残念ながら彼らの史跡はあまり残されていません。治承4年（1180）8月23日に行われた「石橋山の合戦」では、「甲斐国平井冠者」と呼ばれる武士が平家方として参戦しており、平井清隆のことであるかと考える人もいます。平井氏の館跡は石和町上平井に推定されていますが、痕跡はまったく残っていません。また河内義長も治承4年8月25日に兄である武田信義らとともに、源 頼朝に合流するため駿河へ向かっています。義長の動向はしばらく不明になりますが、壇ノ浦の戦い後の元暦2年（1185）には対馬（長崎県）の守護であったことが知られています。山国甲斐の人間である義長が離島である対馬の守護を勤めた理由は不明ですが、義長が源平の争乱時に「伊豆水軍」を中心とした水軍に参加し、海上からの攻撃で大きな成果を挙げたためと考える説もあります。河内氏の館跡なども不明ですが、南北朝期の資料から石和町の井戸や小石和、松本付近に領地があったことが知られています。



武田氏系図　番号は『甲斐国誌』による武田氏歴代